

4年ぶりの快挙!
ディベート甲子園
優勝

見事なチームワークで全国制覇達成!



上/ディベート甲子園に出場した4人。左から棟高佑君、中田克海君、奥山柊君、中野倫君（全員3年）。



右奥/顧問を務める古川晴彦部長と持原なみ子副部长。「一度優勝したからこそ優勝することの難しさを感じた4年でした。塾高は独立不羈のチームです。自分たちで困難を創意工夫して乗り越える気風を部員には承け継いでほしいと思っています。」（古川部長）



4年ぶりにディベート甲子園の優勝トロフィーを手にした塾高ディベート部。高校の部において史上3校目となる複数回優勝校となり伝統校の仲間入りを果たした。今後の活躍にも期待が高まるばかりだ。

通称「ディベート甲子園」と称される第26回中学・高校ディベート選手権にて、4大会ぶり2回目となる優勝を果たしたディベート部。競技ディベートは、原則4名の選手が立論・質疑・第1反駁・第2反駁の各ステージで相手と討論を交わし、いかにして自分たちの立論を守るかを知力を尽くし競い合う競技だ。その戦いを持原副部长は「野球の甲子園と同等のドラマがある」と語り、出場する選手はもちろん、観戦する側も手に汗握る緊張感に包まれ“知の格闘技”とも呼ばれている。

4年前の優勝後は再び優勝を目指すも苦しい時期が続いた上、昨年度はコロナ禍で大会が中止。大会出場すら叶わず引退した先輩の思いを胸に、3年生の中野倫君、奥山柊君、中田克海君、棟高佑君が見事なチームワークで再び優勝の栄冠を掴んだ。「今年度もコロナ禍で普段の活動はオンラインが中心、ディベート甲子園も初のオンライン開催で、先輩から教わったメソッドをなかなか生かせず、自分たちでゼロから戦略を練り上げる感じてした」（中田君）

例年通りの遠征ができなかった代わりに新しい学校と練習試合を組んだり、検事や弁護士として活躍するディベート部OB

今年度は1年生が11名入部し総勢19名の大所帯となったディベート部。



塾高ディベート部の最大の武器は最後まで諦めないハングリー精神と互いを尊重し合あえる仲間たち。

に試合を見てもらう機会を設けたりとオンラインの利点を生かした練習や試合経験を積むことができた一方で、オンラインならではの苦労も多かったという。たとえば試合では、議論の内容だけでなく、コミュニケーション点=スピーチ力もジャッジの対象となるため「間の取り方や声の大きさ、原稿を読むスピードなど、オンライン上でも相手に伝わりやすいベストな感覚を掴むのにとっても苦労しました」（中野君）。さらに、メンバー同士のコミュニケーションの取りづらさも懸念点となった。「オンラインだとまるでひとりで戦っている感覚になりました。だからディベート甲子園のときは、ネット環境のいいメンバーの自宅に4人で集まり試合に参加しました」（棟高君）

オンラインでのデメリットを克服する形で挑んだディベート甲子園の決勝では、強豪・創価高校との対戦となった。今大会でベストディベーター賞を受賞した奥山君はその試合をこう振り返る。「創価高校が決勝戦で新しいジャンルの立論を持ってきたのですが、その対策のために試合3分前くらいまで原稿を書いているような状況で試合中も緊張して頭が回りませんでした。でもメンバーがとてもがんばってくれたので、自分も針の穴に糸を通すような感覚で最後まで諦めずに戦いました。優勝が決まったときは、『やりきった!』という達成感でいっぱいでしたし、コロナ禍でなかなか交流できなかった先輩たちが喜ぶ姿も見られて胸がいっぱいになりました」（奥山君）

そんな彼らの奮闘ぶりを「コロナ禍でいつ気持ちが途切れてもおかしくない状況だったのですが、彼らの諦めない気持ちが今回の優勝につながったと思っています」と古川部長は語る。諦めない気持ちで一丸となり戦った4人だが、戦略を組み立てる過程ではぶつかることも多かったという。だがそれも3年間で培った信頼関係の賜物だと口をそろえる。「互いに認め合っているからこそ、言いたいことも言えるし、任せることもできます。コロナ禍で部員同士の交流が難しい状況ですが、先輩たちには信頼できる仲間をつくること、そして塾高ディベート部の諦めないハングリー精神を引き継いでほしいと思っています」（中田君）

